

主 題：混乱の嵐からの避け所

聖書箇所：詩篇 11篇

テーマ： 拠り所を失い不安や恐れが襲う時、どのようにして主に信頼し続けるか

今朝、私たちがともに学ぶことばは詩篇11篇です。

詩篇11篇 指揮者のために。ダビデによる。

:1 主に私は身を避ける。どうして、あなたたちは私のたましいに言うのか。「鳥のように、おまえたちの山に飛んで行け。

:2 それ、見よ。悪者どもが弓を張り、弦に矢をつがえ、暗やみで心の直ぐな人を射ぬこうとしている。

:3 拠り所がこわされたら正しい者に何ができようか。」

:4 主は、その聖座が宮にあり、主は、その王座が天にある。その目は見通し、そのまぶたは、人の子らを調べる。

:5 主は正しい者と悪者を調べる。そのみこころは、暴虐を好む者を憎む。

:6 主は、悪者の上に網を張る。火と硫黄。燃える風が彼らの杯への分け前となろう。

:7 主は正しく、正義を愛される。直ぐな人は、御顔を仰ぎ見る。

2019年12月末、私たちの生活はある出来事をきっかけに一変しました。そうです、中国武漢市で初めてコロナウィルスが確認され、その翌月には日本でも最初の感染者が確認されたと報道されました。そしてこの日を境にこれまで私たちが当たり前だと思っていたものが当たり前のものでなくなってしまいました。学校や仕事がオンラインになり、友人や親せき、教会の兄弟姉妹に会いたいと願っても気軽に会うことができなくなりました。どこに行くにもマスクを着けなければならず、人の移動が制限され、飲食店が閉められたり、多くの人が集まって楽しむことのできたスポーツ観戦やまたさまざまな行事にも規制がかかり、中止になったりもしたのです。気づいたころには終わっているだろう、当初あったそんな考えも、今ではいつになったら終わるのだろう、そんな考えへと変わりました。社会は混乱し経済は乱れ、これまで何も意識せず当然のことのようにできていた日常生活ができなくなりました。私たちの生活の基盤、拠り所としていたものが揺らいでしまったのです。

そしてその結果、人々はいつまでたっても終わりの見えない現実不安を覚え、日々テレビやネットで流れてくるさまざまな情報に恐怖心をあおられ、あきらめや失望を抱いたりするのです。また自分の力ではどうすることもできないこの現状に、次第に不満や怒りが心を支配し、先も見えないこんな中でどうして希望など見出すことができようかと、そのやるせない思いを周りの人に見境なくぶつけてしまう、そんな事件や争い事も起こるようになりました。自分の思いどおりにならないことがあったり、自分自身の基盤としているものがぐらついてしまうと、時に私たちは混乱して恐れを抱き、パニックに陥ってしまうことがあります。もちろんこれはコロナに限ったことではありません。私たちは私たちの周りにあふれるさまざまなもので心をざわつかせ、不安になることがあります。家計のことも夫婦のことや子育てのことも、健康や人間関係、仕事や勉強、将来のことなどを考えれば、自分の手には負えない、どうしよう、そんな思いが脳裏をよぎり、心配で何も手につかなくなってしまうこともあるはずです。また、目を背けたくなるような悪、到底理解できない不公平さ、そういったものを目の当たりにすれば、恐れや悲しみを覚えたり、突如として自分の身に降りかかる苦しみや痛みで先が真っ暗になる時に、失意が心の中に沸き上がってくることもあるでしょう。今置かれている状況は苦しく、自分にはどうすることもできなくて不安だ。自分の周りを見渡しても周りも恐怖でパニックに陥っている。こんな状況の中で自分に一体何ができるのだろう、どうにかしてここから逃げ出したい。皆さんもこれまでにこんな思いを経験したこと、また今まさにこのようなことに心当たりのある方はいないでしょうか？恐らくこれまでの歩みを振り返ってみれば、多くの方がさまざまな機会に経験することだと思います。

では、周りがパニックに陥り、恐れや不安が自分の心を襲う時に、私たちはどのようにその状況に対して応答するべきなのでしょう？いや、その状況にあって、どのように応答することができるのでしょうか？きょう私たちが見るこの詩篇11篇は、まさにこの問いに対する答えを教えてください。この詩篇を記したダビデはまさにそのような状況の中に置かれていました。これまでに私たちは幾度となく見てきましたけれども、ダビデはここでも敵にいのちが脅かされるような危機的状況にあったのです。そしてその中で大きな苦しみを抱えていました。また、彼自身を取り巻く環境が不安定で、希望の見えないものであっただけでなく、彼の周りにいた人々、恐らく彼の友人たちが恐怖を覚え、パニック

に陥っていました。残念ながら具体的にどのような歴史的背景の中でこの詩篇が記されたのかについては詳しくはわかっていません。ある人はこれはダビデがサウル王に追われていた時に記されたものではないかと考えていたりもしますし、またある人は息子アブシャロムに攻められて泣きながら山へ登って行く時に記されたものではないかと考えていたりします。しかし、これらの考えはどれもこの11篇にふさわしいとは思えません。それはこの詩篇に登場するダビデが敵の圧力に屈して逃げ出すのではなく、逃げ出すことを拒んで主に対して信頼を置き続けている姿を私たちはこの中に見ることができるからです。詳細がどのようなものかはわかっていませんけれども、しかし、言えることはダビデの身に危険が迫り、恐れや不安を抱いても仕方のないような状況にあったということです。そしてその中において、彼はさまざまな圧力や苦しみから逃げ出すのではなく、ただ主を見上げ、主に忠実に歩もうとしていたのです。

そんな彼がこの詩篇を通して私たちに教えてくれていることをまとめるとするならば、次のことが言えます。混乱の嵐が吹き荒れる中、私たちは恐れや不安に心を支配させるのではなく、揺るがぬ避け所である主に信頼して生きていくことができる。私たちが正直になれば、私たちは時に周りがパニックに陥り、先の見えない状況の中に置かれれば、主に信頼することが難しいと感じてしまうことがあったりします。しかし、ダビデはそのような中でいつも主に忠実に歩んでいました。では一体、どうすれば、私たちもこのダビデと同じように自分の身に危険が迫り、周りの人々が混乱している中でも揺り動かされることなく信仰に立ち続けることができるのでしょうか？どうすれば恐怖や失望に心が支配されそうになる時に、平安を見出し、忠実に歩む力を持って変わらず歩んでいくことができるのでしょうか？きょうはそのことをともに考えていきましょう。この時間を通して、いま一度ひとりひとりがどのような信仰の土台に立っているのか、そしてその信仰の土台のすばらしさについて心から感謝する時間になることを心から祈っています。

A. ダビデの信仰を感かせようとする混乱 1-3節

さて、今回見ていく詩篇11篇は大きく二つの場面に分けることができます。一つ目の場面が1-3節に出てきています。それはダビデの信仰を感かせようとする混乱が起こっていたのです。一体どんな混乱がダビデを取り囲んでいたのかを見る前に、私たちはいつもと同じようにダビデが揺るぎのない確信を持っていたことを見ることができます。

1節「主に私は身を避ける。」と、こんなシンプルな彼の告白が書かれていました。ダビデはよい時も悪い時も、どんな時も自分の主にすべてを委ね続けることが何よりも最善であることをよくわかっていました。彼はまたここでもこれまでと同じように「主」、ヤハウェと声を揚げています。世界を創造された全知全能の神、アブラハム、イサク、ヤコブの神、イスラエルの契約の神である、そのお方が自分と個人的な関係にあることを覚え、この方への信頼を口にしていました。ダビデは自分の愛するこの主がどんな敵の攻撃からも守ってくれることを、どんなに人の目には理解できないようなこと、厳しい状況に置かれることがあったとしても、この主のうちに平安を見出すことができる避け所であることをよくわかっていました。そして彼はこういったことをただ知識として持っていただけではなく、自分の体験を通して、そのことをさらに学び続けていたのです。以前見た詩篇9:9にも「主はしいたげられた者のとりで、苦しみの中のとりで。」と書いてありました。彼はどんな時も主に対して忠実に歩んでいました。どんな状況に置かれることがあったとしても、彼は避け所である主に身を委ねて歩んでいました。彼の信仰はどんな状況に置かれたとしても変わることはありませんでした。彼は自分の力や財力、自分の王としての権限や自分の知恵に信頼する歩みをしようとはしていませんでした。

彼がしていたことは主に信頼して生きること、ただそれだけだったのです。そしてそれが彼の示したあかし、彼の生きざまでした。私はたとえひどい苦痛を味わうことがあったとしても、先の見えない暗やみにひとり取り残されたように感じ、不安や恐怖が襲って来たとしても主がともにいてくださる、私には拠り所である主がいつもともにいてくださることを知っている。だから自分の身に何が起ころうとも私の周りで何が起ころうとも、この避け所である主のうちに身を横たえ、この方のうちに平安を見出すことができる。これがダビデが持っていた揺るがぬ確信でした。だからこそ彼は続けてこう言うのです。1節「どうして、あなたたちは私のたましいに言うのか。」と。主に対する確かな信仰を持っていたダビデは少なくともここで彼の魂、彼自身を感かせようとする二つの存在に取り囲まれていました。あるものはダビデの持っている信仰を意図的に、またあるものは直接意図せずとも信仰を揺さぶろうとしていました。では一体どんな存在が彼の信仰を揺さぶろうとしていたのでしょうか。

1. ダビデの信仰を揺さぶろうとした二つの存在

1) 彼のいのちをねらう敵たち

まず一つ目の存在は彼のいのちをねらう敵でした。2節に「それ、見よ。悪者どもが弓を張り、弦に矢をつがえ、暗やみで心の直ぐな人を射ぬこうとしている。」と書いています。「悪者ども」は主に信頼し、主

に従おうと歩む、「心の直ぐな」ダビデのいのちをねらっていたのです。彼らは暗やみの隠れた所から今にもまさに彼を射抜こうとして矢を準備し、ねらいを定めていました。ダビデは周りの人々から自分のいのちが狙われていることを聞かされてきました。しかし、それがいつ起こるのか、敵がどこからねらって来るのかについては何もわかりませんでした。

もし私たちが同じ立場ならば、どのように振る舞うでしょう。自分を滅ぼそうとする敵がまさに身近に迫って来ているのです。自分のいのちを消し去ろうとする者が暗やみに隠れて待ち構えていることを耳にしたのです。皆さんはそれでも私はどんなことがあろうとも主に信頼すると言うことができるでしょうか？それとも不安で心がいっぱいになり、とりあえず今はこの問題は後回しにしよう、この問題からは一旦逃げ出そうとするのでしょうか？

2) ダビデをそそのかす混乱した友人たち

二つ目の存在はダビデをそそのかす混乱した友人たちでした。ダビデはただでさえ敵にねらわれ、自分の身に大きな危険が迫っている中で苦しんでいました。しかし、そんな圧力を受けていたダビデの状況を、彼のことを思う友人たちがさらに難しくしていました。ダビデが敵にねらわれていることを知った彼の友人たちは「鳥のように、おまえたちの山に飛んで行け」と11:1の最後でダビデに言っていました。要するに彼らはダビデ、あなたには非常に深刻な危険が迫っている。あなたのいのちが敵によって脅かされている。だから今すぐここから逃げ出さない、早くここよりも安全な場所、山へと身を隠して逃れて行きなさいと言ったのです。

そのように言った彼らは続けて3節でも「抛り所がこわされたら正しい者に何ができようか。」と言っていました。この「抛り所」ということばは、社会で確立されている習慣や慣習、価値観や法律といった人々の生活を支える基盤となるもののことを指し示しています。要するに、ダビデの友人たちは彼に「見てごらん、私たちの住んでいるこの世界の文化や習慣がひっくり返って、法の基準が崩れ、善を悪、悪を善と言うような悪者たちが好き勝手に生きていて、私たちの抛り所の根底が壊れてしまったら、一体私たちに何ができるのだろう。ただ逃げるしかないじゃないか、安全な山に退きなさい、そうすれば、あなたの問題も解決するでしょう」と言うのです。ダビデの友人たちはダビデの様子を見、自分たちの周りを取り囲んでいる様子を見た時に、恐れ戸惑いパニックに陥ってしまったのです。どうしよう、敵が迫ってきている、このままでは大変なことになるだろうと。私たちに何もすることができない、とりあえずダビデだけは逃げてもらおうと。

ダビデの友人たちの一体どこが間違っていたのでしょうか？彼らが抱えていた問題は一体どこにあったのでしょうか？ある人はこう思っているかもしれません。彼らはダビデのことを思って、逃げなさいとアドバイスしている、すばらしい友人ではないかと。もちろんダビデを助けたいという思いが間違っていたわけではありません。しかし、彼らは最も大切なことを忘れていました。それは神様に信頼することです。1-3節を見てもわかるように、彼らのアドバイスの中には一度として神ということばが出てくることはありませんでした。彼らは置かれた状況を自分たちの目で見、自分たちの知恵や力でどうにかしようと努力し、そして自分たちにはどうすることもできないことに気づいた時に慌てふためいていたのです。彼らは神様に信頼しようとするダビデを励ますのではなくて神様を忘れ、この世の状況や自分たちの身に起こっていることだけに心が捕らわれてしまっていました。

思い返してみれば、まさにペテロもイエス様に対して同じことをしていました。マタイの中でイエス様が弟子たちにご自分が多くの苦しみを受けること、そして十字架に架かり三日目によみがえらなければいけないことを教えていた時に、パウロは慌てて主をいさめてこう言いました。マタイ16:22

「するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。『主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。』」と。ペテロもこの詩篇の友人たちと同じでした。彼もイエス様のことを心から愛していました。しかし、神のご計画に信頼することよりも自分の思いを優先したがゆえにイエス様のことばを受け入れられなかったばかりか、あろうことか主イエスに対して彼の考えを押しつけようとしたのです。そしてその結果、イエス様は彼に23節「しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。『下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。』」と答えられました。残念ながら、このような神様を除いたアドバイス、人の知恵にのみ基づいた勧めは、確かに一時的に問題から目をそらすことがあったとしても、結局のところは問題を解決することにはなりません。人の知恵には人の心を真に慰め、希望を与える力はないのです。だからこそそのことを一番よく知っていたダビデは、その友人たちに「どうして、あなたたちは私のたましいに言うのか。」と言います。ダビデは困惑していました。自分はどんな状況にあっても、必ず自分のことを守ってくださる神のうちに身を避けていると。確かにさまざまな苦しみや試練は現実のものとして存在しているけれども、自分にとって必要なものはもうすべて持っている。この世界で何が起きようとも、どれだけ悪がはびこっていて、この世界の基盤が崩れ去ってしまうことがあったとしても、自

分にはそんな世の状況に左右されることのない、いやむしろそれらすべてを支配しておられる神がともにいてくださっていると。だとしたら、なぜ心配しなければいけないのか——。なぜ満足している自分に対して不安を抱かせようとするのかと。どうして完全な平安を与えることのできる磐の中にいるのに、それ以外のものに目を向け、逃げ出さなければいけないのかと。

ダビデは混乱の嵐に巻き込まれ、パニックに陥っている人々の中で逃げ出すこともせず、変わらず主に信頼し続けていました。そしてこの姿こそ私たちがきょう模範にするべき姿です。皆さん、自分の歩みを少し振り返ってみてください。私たちはどんな時も変わらず、たとえ混乱の中にあっても主に従い続けることができているのでしょうか？

ただし、誤解してほしくないのは、クリスチャンがどんな時も信仰に立つというのは、何も苦しみに直面していたり、自分の身に危険が迫っている時に一切それらから逃げ出してはいけない、そんなことを教えているのではないということです。逃げること自体が悪いことではありません。この詩篇を記したダビデ自身もサウル王様やアブシャロムから追われた時に逃げていました。またヨセフやマリヤもイエス様を連れてヘロデ王様から逃げるためにエジプトの地へと行ったこともありました。私たちは信仰に立って、たとえ周りに理解されることがなかったとしても、おかしく思われることがあったとしても、またどんな犠牲を払うことになったとしても、主に忠実に従い、それらを信仰によって耐え忍ぶことが必要な時があります。しかし、同時にある時には知恵をもって退くことも大切になります。

では、単に逃げ出すことと知恵をもって退くことの違いは何でしょう？少なくとも言えることは、私たちはたとえどんなことがあったとしても、恐れや不安という動機で逃げ出すことは決してしないということです。主に忠実であろうとする者は、周りの環境に自分の行動を決められるのではなく、主に對する信仰に基づいてすべての行動を決めていくのです。もちろんこれには難しさも伴います。私たちの肉はすぐに状況に心を騒がせてしまったり、また楽な方へと早く結果を見ることを望む私たちには、主に信頼することよりも逃げ出すことに心が揺れ動いてしまうこともあるかもしれません。私たちは目に見えないものではなく、見えるものに信頼を置きやすいのです。

ここに出てくるダビデの目の前にも、危険から身を避けることのできる山がありました。彼はそれを視界におさめていたのです。彼にとってそこに逃げるという選択はある意味簡単なものでした。しかし、彼はそんな目に見えるものに助けを求めるのではなく、目には見えなくともそれよりもはるかに勝るすばらしい避け所である主に信頼して歩んでいました。私たちはそのような歩みをする事ができているのでしょうか？それぞれ少し自分の歩みを振り返ってみてください。私たちの歩みを周りの人が見る時に、彼らは私たちのうちに何を見るのでしょうか？神を知らない人々と同じように、私たちを取り巻く状況に心が捕らわれ、恐れを抱いて不安に駆られパニックに陥っている姿でしょうか？それともどんな時も主にあって歩み、この方のうちには確かな希望がある、確かな平安があると喜びを持って生きている姿でしょうか？確かに私たちの周りでいろいろなことが起きています。しかし、もし私たちの歩みとこの世の生き方が同じものだったとすれば、そこには大きな問題があります。

また、私たちは世の光として主に召し出されました。私たちが世の光として立てている証しはどのようなものなのでしょうか？この希望のない世の中にあって、確かにキリストのうちにこそ希望が、この方のうちにこそ平安があると示し、私たちではなく主が崇められること、そんな証しを立てているのでしょうか？それともいつも悲しみや失望に暮れ、あたかも主に喜びがないかのような、キリストのうちに希望がないかのような証しを立ててはいないのでしょうか？そして最後に私たちの振る舞いや発言は周りの人の心に不安や恐れをもたらしてしまうようなものになってはいないのでしょうか？

どれだけその人のことを思っていたとしても、もしそのアドバイスに神が欠けているのであれば、そのアドバイスはその人のためには一切ならないということです。どんな状況に置かれても、相手がより主を見上げ、主に對する確信を強めることができるように、そんな励ましのことばを私たちはかけているのでしょうか？ダビデは彼を惑わせる混乱の中にあって、いつも変わらず主を見上げ、そして主に信頼して歩むことをみずから選択していました。私たちも同じようにどんな誘惑、どんな困難に遭ったとしても、主を覚え、主に信頼する時に私たちの信仰は成長していくのです。

B. ダビデの揺るがない信仰の根拠 4-7節

1. ダビデの信仰を支えた四つの根拠

さて、ここまで私たちはダビデが彼を惑わせるさまざまな混乱の中にあって、揺るがされることなく主に信頼した姿を見てきました。続けて私たちは4-7節の中で二つ目の場面を見ることができます。それはダビデの揺るがない信仰の根拠です。

ダビデは苦しみや試練の中を何も考えずにただ盲目的に私は神様を信頼します、そのような歩みをしていただけではなかったのです。どんな時も彼が主に忠実であれたのは、彼のうちに確固たる理由があったからでした。では一体なぜダビデはそこまで主に堅く立ち続けることができたのでしょうか？一体何が

彼を励まし、彼の心を力づけていたのでしょうか？その四つの根拠を残りの時間で見ていきたいと思えます。

1) 主権者なる主が天から治めておられることを知っていたから 4 a 節

なぜ彼の信仰が揺るがされなかったのか、それは彼が主権者なる主が天からすべて治めておられることに確信を持っていたからです。4 節に「主はその聖なる宮におられる。主はその王座が天にある。」（新改訳 2017）とあります。ここで「聖なる宮におられる」ということばと「その王座が天にある」という二つのことばが並立して用いられています。これは主が天からこの世界で起こるすべてのことを統治されているということ、そして地上でなされる悪に対して正しいさばきを下されることを表しています。ダビデは主権者なる神がともにいてくださることのすばらしさをよくわかっていました。敵がやみの中に隠れて自分のいのちをねらっている、自分には彼らがどこにいるのかもわかっていない、どこから攻めてくるのか、どこに潜んでいるのか、そのことすらもダビデには見当もつかない。でも自分の主はそんな敵の姿も天からすべてごらんになっていてくださっている。そしてこの主の守りに、この主のうちに自分は身を委ねることができる。

また、拠り所がこわれ、混乱に陥って不安や恐れに支配されている者たちが私の周りにはたくさんいる。自分が周りを見渡しても、自分たちの頭では理解できないことや受け入れられないようなことも確かに起こっている。でも自分の主はそれらすべてのことを支配され、この方の御手を逃れて起こっていることはこの地上には一切存在しない。そしてたとえどんなことがこの地上で起こったとしても、天にある主の王座は決して揺らぐことはない。いつまでもこの主は変わることがない。必ず主はご自分のみこころに従って正しいことを成し遂げられると。私はこんな主のご計画に期待して歩むことができると。ダビデはこうして自分に迫り来る敵に目を向けるのでも、彼の友人たちのようにこの地上のことにのみ心を捕らわれるのでもありませんでした。すべて思いのままに支配されるそんな主権者である主に委ねていたのです。彼は自分の力や自分の知恵で問題を解決しようとはしませんでした。だからこそ大胆にこう言うことができたのです。私には状況をどうすることもできない。しかし、すべてを支配されている主権者がともにいてくださっている。だとすれば私は何を恐れる必要があるのだろうか。これがダビデの信仰が揺るがなかった一つ目の根拠でした。

そして今日の私たちも同じ主権者である主に信頼し、歩んで行くことができます。私たちは私たちの主がすべてのことを支配されている主権者であることを覚え、この方に自分を委ねて歩んでいるでしょうか？それとも自分のすべてを明け渡すことを拒み、自分の知恵や力に頼った生き方をしていないでしょうか？もし、あなたが今なお自分自身や周りの環境に信頼を置いて歩んでいるのであれば、自分の思いどおりにならないことが起きれば、その土台は容易に崩れ去ってしまいます。そしてその中であって恐れや不安を抱き、こんな状況の中で自分はどうしたらいいのだろうと嘆いてしまうのです。私たちに必要なことはたとえ理解できなようなことが起こっていたとしても、私たちの理解を遥かに超えてすばらしいことを成し遂げられる主権者なる主に身を委ねて歩むことです。ここに私たちの真の喜びがあります。

2) 全知の主が心のうちもすべてご存じであることを知っていたから 4 b 節

またダビデは単に主権者なる主を知っていたから信仰が揺るがなかっただけではありませんでした。二つ目の根拠は、全知の主が自分の心のうちもすべてご存じであることを彼が知っていたからでした。4 節の後半に「その目は見通し、そのまぶたは、人の子らを調べる」と書いてあります。ダビデは主が彼の身に起こっていることだけでなく、彼の周りに起こっていること、何より人の心を主がごらんになられるお方だということを知っていたのです。ここで特に「まぶたは、人の子らを調べる」という表現があります。この「まぶたは……調べる」という表現は余り聞きなれないものですが、これは要するに、主がいつもひとつひとつの詳細に至るまで注意深く観察されているということを強調しています。ダビデは主が外側の振る舞いだけでなく、心の内側をごらんになられること、心の内側にあるものすべてをはっきりと見通されることをよく知っていました。だからこそ同じ詩篇の中でこう主に願っていたのです。詩篇 139 : 23 「神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。」と。ダビデは全知の神がともにいることのすばらしさをよくわかっていました。たとえ自分が自分の思いや苦しみを上手に言い表すことができなかつたとしても、自分以上にこの主は自分のことを知っていてくださる。自分の周りの人が理解できないような、理解してもらえないような痛みや悲しみを味わったとしても、私の主はいつも私のことを覚え、私に憐れみを示してくださいと。こんな全知の神に信頼していたからこそダビデの信仰は揺るがされることがありませんでした。そして困難の中にあっても慰めを見出しながら歩むことができたのです。

また同時に、主がごらんになっている自分のうちのすべて、弱さや罪をもご存じであることも彼は知っていました。そしてその部分を成長させるために、時に信仰を試す試練を与えられることもよくわか

っていました。だからこそ彼は人間的に考えれば一見恐れを抱いてしまうような状況の中でも主に信頼し、その試練から逃げ出そうとはせず、忠実に歩もうとしていました。

では私たちはどうでしょう？今も変わらずこの主は人の心もすべてご存じのお方です。この方を私たちが知っているのだとすれば、それにふさわしい歩みを私たちははしているのでしょうか？私たちの必要を知っておられる主が、私たちの弱さもすべて知っておられる主が、ひとりひとりが信仰において成長することを望んで試練を与える時、私たちはその試練に対してどう振る舞っているのでしょうか？不安やパニックに陥り、主に信頼するのではなく試練から逃げ出すことを望むのでしょうか？あなたの置かれている状況、心に抱えている思い、そういったものもすべてご存じでいてくださっている主がおられるにもかかわらず、その神に助けを求めるのではなく、神から目を背け、目の前の困難に不満や怒りを覚えたりしていませんか？私たちに必要なことは、全知の神に身を委ねて歩むことです。私たちの心のすべてを知ってくださっている神が、私たちとどんな時もいつも一緒にいて、私たちに必要な力や助けを私たちに必要なタイミングで与えてくださるこの主に信頼すること、ここに私たちの真の慰めがあるのです。

3) さばき主である主が悪に正しく報いられることを知っていたから 5-6節

続けてダビデの信仰が揺るがなかった根拠三つ目は、さばき主である主が悪に対して報いられることを彼が知っていたからでした。どうして彼の信仰が揺るがなかったのか、それはさばき主である主が悪に対して正しく報いられることを彼が知っていたからでした。ダビデは確かに敵にいのちをねらわれ、非常に大きな痛み、痛みの中にいました。彼の置かれていた状況は人間的に見れば希望を見出すことなどできないようなものでした。彼の友人たちはダビデに迫るその悪がほんの間近に迫っていることで恐れ惑っていました。周りから見れば、ダビデに対してまさに悪が勝利したかのような、悪が勝ち誇っているように思える状況だったかもしれません。しかし、そんな中でダビデは自分の主がさばき主であることをよく覚えていました。彼は自分にはどうすることもできない苦痛の中で、こう自分に言い聞かせるのです。私の主は暴虐を憎み、悪者には必ずそれにふさわしい罰を与えられると。悪をそのままにしておかれることは決してない、そんな正しい義の審判者なのだ。

ここに「火と硫黄」ということばが出てきています。これは多くの人はダビデがあのだソドムとゴモラに下ったさばきを思い浮かべながら記したのではないかと考えていたりすると思います。ソドムとゴモラに下った神のさばきは創世記19:24-25に「そのとき、主はソドムとゴモラの上に、硫黄の火を天の主のところから降らせ、これらの町々と低地全体と、その町々の住民と、その地の植物をみな滅ぼされた。」と書いています。ダビデはこうして主が自分の置かれている状況を顧みて、悪に虐げられている自分を救い出してくださることに期待を置いて、信頼して歩んでいたのです。この主は世界にあふれている不義をそのままにはされない、必ず正される時がやって来ると。だから今の苦難から逃げ出すのではなくて主に信頼して耐え忍ぼうと。

では皆さん、主が悪をそのままに放っておかれない、罪を必ずさばかれるさばき主だとすれば、この真理に対してあなたはどうか答えるのでしょうか？もしこの中に主のさばきは自分には関係ない、そんなものは実際には起こらないと思われている方がおられるのであれば、大切なことなのでよく聞いてください。罪を憎まれる聖い神は、神に背き自分勝手に生きていたソドムとゴモラの人々を実際に滅ぼされました。この町の人たちも今のあなたと同じように考えて生きていたのです。神なんて知らない、自分の人生は自分の好きなように生きればいいと。きょう私たちは主がすべてのことを支配されている主権者であることを見ました。また、この主はすべてのことをご存じである全知の神であることも見てきました。主の正しいさばきの日は必ずやって来ます。そして私たちはこの主の前にひとりひとり立つ日がやって来るのです。あなたが人生の中でしてきたこと、それらはすべて主の前に明らかです。どれだけ隠そうとしても、その時になって幾ら弁明しようとしても、後悔してももう遅いのです。Ⅱペテロ3:9にこのようなみことばが書かれています。「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」と。今、さばきがないことはさばきが来ないということではありません。主は今にでもさばきを下すことができるお方です。しかし、そんなさばきに値する罪人に対して、主は忍耐深くいてくださっている。ですからどうかこの主が今忍耐を持って待ってくださっている間に、自分のこれまでの生き方を改めて、主の前に悔い改めて主イエス・キリストを主として、救い主として、そのような歩みをきょうから始めてください。

今、主を愛し、主のために忠実に歩もうとされている皆さん、私たちに必要なことはこのさばき主に身を委ねて歩むことです。必ず間違っていることを正してくださる、そんな神が私たちをどんな時にあってもともにいて、私たちのことを弁護してくださるのです。ここに私たちの真の平安があります。

4) 正しい者を愛される主にお会いすることを知っていたから 7節

最後に四つ目の根拠は、正しい者を愛される主に自分がいつかお会いすることを彼が期待し、確信していたからでした。7節に「主は正しく、正義を愛される。直ぐな人は、御顔を仰ぎ見る。」とあります。ダビデはここで「直ぐな人は、御顔を仰ぎ見る」と言いました。言い換えれば、主を愛し、主に真っ直ぐに従う者には主からの祝福があるだけでなく最後には主に直接お会いするという事です。考えてみてください。この約束がダビデにどれほどの喜びをもたらしたことでしょう。確かに今は敵にいのちがねらわれていて無力な自分はどうすることもできない。社会は混乱し、人々も不安にあおられて一見すると希望など見出すことができない、そんな中に私はいる。もちろん主は自分のことを守ってくださる、でもたとえいのちを落とすことになったとしても、そこで終わりではない。私は愛する主に必ずお会いするのだと。この約束を彼は心から信じていたからこそ、ひどい失望を味わうことがあったとしても、どれだけ彼の信仰を惑わせるようなことがあったとしても、変わらず主に信頼して歩み続けたのです。

そして、皆さん感謝なことに、この約束が今の私たちにも与えられています。Iヨハネ3：2に「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」とあるからです。私たちもいつか必ずキリストにお会いする日がやって来ます。私たちを愛し、こんなどうしようもない罪人である私のために自分のいのちを捨ててくださった、そんな救い主イエス・キリストにお会いする日がやって来るのです。そしてこの方をその目の前でともにほめたたえる日がやって来るのです。今は確かにいろいろなことが周りで起こっていたり、不安や恐れに心が支配されるようなことがあったとしても、私たちはダビデと同じように言うことができます。私は主にいつか必ずお会いする。だからその時まで自分が置かれている場所で揺り動かされることなく、主に信頼して歩もうと。私たちに必要なことは、私たちを愛してくださっている主に私たちがいつか必ずお会いすることを覚えて生きて行くことです。たとえこの地上でどんなことがあったとしても、どんなことを経験することがあったとしても、必ず主の義の栄冠を受ける日がやって来ます。この主に信頼して、揺るがぬ信頼を置いて歩むことに私たちの真の希望があります。

さて、今朝皆さんとともに周りがパニックに陥り、恐れや不安が自分の心を襲う時、私たちはどのようにその状況に対して応答すべきなのか、どのように応答することができるのかをともに見てきました。ダビデが私たちに教えてくれていたことは、どんな混乱の嵐が吹き荒れる中にあったとしても、私たちは恐れや不安に心を支配させるのではなく、揺るがぬ避け所である主に信頼して生きて行くことができるということでした。確かに私たちの周りにはさまざまなことが起こります。今もコロナの中に私たちはありますし、またそれぞれ自分の生活を見れば、自分の手に負えないようなことも必ずこれから起こったりするのです。私たちには先のことは一切わかりません。しかし、私たちには一つのことをよくわかっています。それはたとえ私たちがどんな状況に置かれることがあったとしても、すべてのことを支配されている神が私たちとともに歩んでくださっているということです。たとえ私たちの頭では理解できないことがあったとしても、それらすべてを支配されて、それらすべてをご存じの神があなたとともに歩んでくださっているということです。そしてこの方は必ず間違いを正され、正しい者にふさわしい報いを与えてくださる方です。そして何より私たちはこの主にいつか必ずお会いすると。だとすれば、どんな混乱の嵐が吹き荒れたとしても、私たちの応答は、大丈夫、私はどんなことがあっても揺り動かされることなく、ただ主を見上げて、この主に忠実に歩もう、そのようなものではないでしょうか。いつもともに主に信頼して歩む者として一緒に成長していきましょう。